

ちちぶバイオマス元気村発電所 研修視察報告

翠戀会
公明党

7月30日に埼玉県秩父市のちちぶバイオマス元気村発電所を行政視察研修を行った。その研修内容を報告いたします。

○研修内容

1、バイオマス施設の これまでの経過と現 状及び故障の発生状 況と対応

ちちぶバイオマス元気村発電所施設は、「木質系バイオマスエネルギー事業」として平成19年4月に稼動した。運転時間が12時間/日運転で、平成24年8月22日に総発電電量100万kwhを達成。温水を元気村クラブハウス温浴施設や足湯などに供給していた。今年の3月15日にチップヤード付近から火災が発生。

2時間後に鎮火したが、消火の際に水をかぶったガス化炉や被害状況を視察しながら説明を聞くことができた。出火原因は不明との事である。

2、プラントメーカー の指導と対応状況

月1回メンテナンスを行っており、メーカーの月島機械(株)の担当者は、よく指導に来てくれて、火災時にも当日に駆けつけてくれたようだった。しかし、現在はバイオマス発電に関する開発・技術員を削減しており、ホームページからもバイオマス関連を削除している現状である。

3、今後の方針と課題

木質バイオマス発電事業を核とした「次世代型環境学習施設 吉田元気村」として取り組み、サニテーション施設(バイオマスを使用した排水処理施設)、てんぷら油リサイクル工場、体育館屋根に太陽光発電システム等もある。

多くの企業や小・中学校の環境プログラムとして活用しているだけに、発電再開を検討している状況であるとの事。しかし、建設コスト2億4360万円のうち、林野庁から1億円の交付金を受けており償還金も数千円ある。既に7千万円の基金も取り崩しており、厳しい状況であると話してくれた。

「秩父市 環境立市推進課としては、地域資源の有効活用を進め環境にやさしい循環型社会を目指すためにも、市には発電再開の方向で進めてもらいたいのだが」との本音を担当者は語ってくれた。

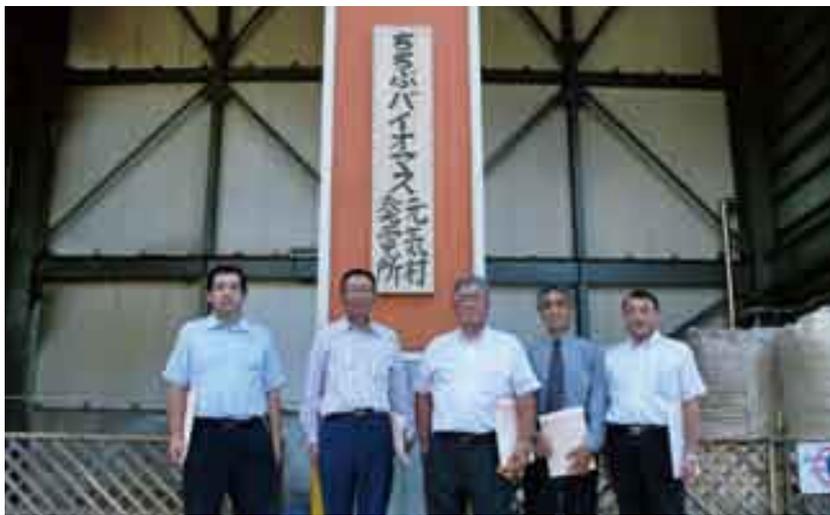


火災発生時、水をかぶったガス化炉

○感想

環境立市を推進し、循環型社会を目指している「ちちぶバイオマス発電所」なので期待もあつたが、仙北市で火災が発生する半年前に、同じような箇所からの出火とその後、状況を聞くと、今後のバイオマス発電施設の稼動が、いかに大変か浮き彫りにされた視察であった。この研修視察をこれからの仙北市議会の議論に活かしていかなければとの思いを強く抱いた、大変な意義な研修視察でした。

(熊谷一夫記)



バイオ施設チップヤード前にて

広報編集委員会

行政視察研修報告

議会広報の愛読率向上を目標として、さる8月19日に「平成24年度全国議会広報コンテスト最優秀賞」「25年度優秀賞」を受賞した山形県庄内町議会を訪問研修した。庄内町議会富樫議長・広報編集委員長・各委員・議会事務局職員の皆さんから歓迎いただきながら活発な意見交換を行った。庄内町議会は広報編集委員会を常任委員会（仙北市は特別委員会）にしており、議会改革と平行して広報の編集に力を入れているとの事だった。議会の改選があると新人議員に議会を早く理解してもらうために新人を全員編集委員にし、その分古参議員に辞表を提出してもらおうという。広報の印刷業者入札は、仙北市議会広報は16ページで年4回発行となっているが、庄内町では4回の総ページ数で入

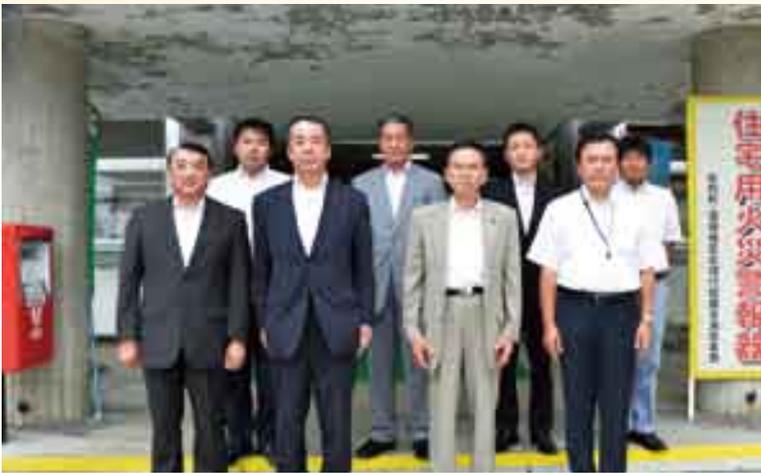
札させており、広報の内容によつてページ数に増減をつけられるようにしているそうだ。内容によっては、かなり町政にとつて微妙な問題も記事にしており、議会の与野党関係や町当局からもクレームの付く事もある

そうだが、そのつど議長判断で掲載の可否判断をしているとの事だった。

感想 とんぼ 返りのあわたたしい視察だったが、なかなか得がたい勉強になった。我々の編集委員会とは、良し悪しは別として驚くほど違う委員会構成や

編集方針だった。推し量るに、広報のみならず議会運営や他の部分についてもこうした違いがあるんだろうなと、大変感心させられた研修視察だった。

（阿部則比古記）



庄内町議会視察

人事案件

○固定資産評価審査委員

進藤 敏夫氏（仙北市角館町水ノ目沢14番地）

元野 英雄氏（仙北市田沢湖生保内字武蔵野82番地7）

本庄 護氏（仙北市西木町上松木内字大地田66番地）

○人権擁護委員

草薙 紀雄氏（仙北市角館町白岩字下掬54番地）

表紙の説明

さる9月21日、恒例の田沢湖マラソンが開催された。絶好の爽やかな秋日和の中、フルマラソン・20キロ・10キロ・ペアマラソン（3キロ）に総勢5279人がエントリーした。1968年のメキシコ五輪で銀メダルに輝いた君原健二選手が招待選手として10キロにエントリーするなど大いに盛り上がった第29回大会だった。本

老骨に鞭打って1時間35分52秒という20代30代の選手顔負けの驚くべき記録をたたき出した。気を良くした本人は（調子に乗ると膝痛めて歩けなくなるぞ、と言う周囲の助言をよそに）来年はまたフルマラソンに出たいと息巻いている。ジョギングしている稲田先輩を見かけたら声を掛けてやって下さい。

（阿部則比古記）

議会の期待のホープ稲田修選手が今年70歳以上の部20キロにチャレンジした。

